

(観音講など)が存在して巡礼の様式を規定していたことがうかがえる。

地域については、国を単位で検討するのが、従来の方針であった。しかし、必ずしも生活と密着しない国単位での把握には限界があり、より細かく検討することで、地域の特殊性について明らかにすると思われる。すでに、肥前国については、ほぼ長崎に限定されるため、独自に取り上げられてきていた。また、山城国については、西岡と呼ばれる京都市西郊が非常に多いことも注目されていた。両地域とも、指南書とは異なった形態(絵馬型)の札を数多く納めており、衰退したとはいえ、西岡では、現在も観音講が続いている。

伊勢国については、四日市・桑名などの商人が多く、金泥・銀泥で文字が書かれた大判で特殊な漆塗りの札を奉納していた。札の残存に関しては、地域格差とともに経済格差もあることが推定されよう。つまり、丈夫で立派な巡礼札であるがゆえに、廃棄されずに残ったのである。このことは、紙と木という材質の違いについても注意を促す。いうまでもなく、紙札は極めて残りにくく、また十九世紀には、同じ紙でできている千社札との重なりを視野に入れ、関東からの巡礼者数の減少を検討することが必要になる。

最も巡礼札が多いのは武蔵国であることはすでに指摘されており、今回サンプリングとして、天井分の巡礼札約二五〇か所(約二二〇〇枚)から武蔵・下総・常陸・下野などを抽出してみた。すると、武蔵・下総については中仙道と利根川・江戸川の間地域、とくに日光街道沿いに集中していることが分か

る。これらは、武蔵国葛飾郡・埼玉郡・足立郡、下総国葛飾郡で、関宿・菖蒲・羽生・忍・幸手・騎西・庄内・八条などの領でまとめられる地域にもあたっている。利根川上流では、熊谷より西側に及ぶことがなく、江戸の住人の札も今回のサンプルの中から見出すことはできなかった。寛永期に江戸小網町から奉納されている札や《落書》も確認されているから、江戸の住人が西国巡礼しなかったわけではない。このように考えると、巡礼札が残るということは、かなり特殊であり、巡礼札から巡礼を検討するには、いろいろな制約があることになる。

しかし、一乗寺の巡礼札によって、地域に残っていない巡礼の事実を明らかにでき、また、巡礼者の足跡をたどるきっかけにもなる。一乗寺の巡礼札から巡礼者データベースを作成して利用できるようにするのが当面の課題である。(この報告は、科学研究費補助金基盤研究(C)「西国巡礼者に関する基礎的データの整理と検討——一乗寺巡礼札のデータベース化——」(研究代表者・幡鎌一弘)の成果の一部である。)

江戸時代前期の遍路道再現

——澄禅『四国辺路日記』を中心に——

柴谷 宗叔

江戸時代前期に四国遍路をした澄禅(一六一三—一八〇)の『四国辺路日記』(一六五三)に基づき、当時の遍路道を探った。現在の徒歩遍路道と重なる部分も多いが、全く異なる場所もある。江戸時代の遍路道は四国各県教育委員会などの調査で再現が試みられているが、真念(？—一六九二)の『四国邊路道

指南』(二六八七)以降の道を対象とするもので、真念より三十年余さかのぼる澄禪の日記に記された道は残念ながらわからなかった。

澄禪は現在の一番霊山寺(徳島県鳴門市大麻町板東)からでなく、十七番井戸寺(徳島市国府町井戸)から打ち始めている。澄禪の日記に番付が記されていないことから、番次通りに打つことは念頭になかったといえる。十七番から現在の番付でいう十三番まで逆打ちし、十一番、十二番を経て十八番からほぼ順打ちに行く。八十八番を打ち終えてから十番から一番まで逆打ちして遍路を終えた。

現在の遍路道と大きく異なる個所の調査結果を中心に述べる。現在、真念の立てた道標が残っており、調査に役立つているが、澄禪は個人で遍路しただけで道標は立てておらず物証に乏しい。真念以後の通常ルートから外れた場所は現地調査で地形などから推測するしかない。

十三番から十一番へは「阿波一国を一目に見る」峠を越えている。徳島市入田町から名西郡石井町にぬける山越えの道で、地蔵峠ではないかと思われる。

十二番から十八番へは名西郡神山町鬼籠野から名西郡佐那河内村を経て小松島市田野町に抜けている。府能峠を越え、佐那河内から徳島市八多町大久保への道をたどったようだ。

二十三番から二十四番への途中に「佛崎にて札を納」という記述がある。佛崎という番外札所は現在には存在せず、調査の結果、日記に記された距離などから高知県室戸市佐喜浜町水尻谷にある佛のような形をした岬であると断定した。

三十八番のある足摺岬から西海岸、月山(幡多郡大月町月山)經由で宿毛に向かっている。真念は真念庵(土佐清水市下ノ加江市野瀬)に打ち戻る道を推奨しているので、「道指南」発行以降現在に至るまで、月山經由の道はたどる人が少ない。澄禪は西伯(大月町西泊)、ミクレ坂(三倉坂、宿毛市)など現在の遍路道とは違った道を経由している。

四十番から四十一番の途中、津島から宇和島に向かうのに松尾峠でなく野井坂を通った。

六十五番三角寺から奥の院(仙龍寺、愛媛県四国中央市新宮町馬立)に寄っている。ここから六十六番へ行くのに徳島県境の境目峠まで尾根道をたどったと思われるが、呉石高原經由の尾根伝いの道があることを確認した。

七十二番から天霧山北側を降り番外海岸寺(香川県多度津町西白方)に行っている。

一番から渭津(徳島市)への帰路、吉野川の渡を使った。大麻街道を行ったと思われる。

日記から当時の遍路がどんなものであったかも読み取れる。澄禪は寺や民家に泊まっており野宿は一度もない。「辺路屋」という言葉がたびたび出てくることから、遍路宿の原型があったことがわかる。また、保寿寺(六十二番宝寿寺)、道隆寺(七十七番)のくだりでは、お接待が行われたとの記載もある。

「高野芳野(吉野)の行人衆」の記述から僧侶は行人方が多く遍路に出ていることがわかる。三崎(高知県土佐清水市三崎)では逆打ちの行人衆と会っているのですでに逆打ちする人がいた。野根(安芸郡東洋町)で会った「幡多の辺路衆」の

記述から、一般人も既に遍路をしていた。戸坂(愛媛県西予市鳥坂)の庄屋は「辺路も数度」と書かれ、重ね打ちをしていた人もいたことがわかる。

説経節を読む——宗教研究としての読解の試み——

千葉 俊一

発表者の研究目的は古典文芸・芸能に顕れた仏教思想を読み取ることである。しかし、それは經典思想や日本仏教の宗祖たちの思想の直接的反映ではない。大乘仏教の重層した変容の結果である日本仏教がさらに変容し、在家民衆の生活において血肉と化したものである。発表者はこれを「生活の中の仏教思想」と呼びたい。中世文芸(芸能)である説経節にこれを読み取ることが発表者の当面の課題である。

説経節とは武家・公家・豪農の子弟が惨憺たる苦難(ことに愛別離苦)を味わった末に栄華を回復する、ないしは死後神仏となる(あるいはその両方)という筋立てを持つ語り物である。発表者は説経節を質・量ともに代表する五作品、『さんせう太夫』・『しんとく丸』・『をぐり』・『かるかや』・『まつら長者』を考察対象とし、説経節先行研究の仏教との関係を論じてこなかった問題点を意識し、かつ恩愛を説経節の核心としてきた視点を引き継ぎながら、「生活の中の仏教思想」をとらえていきたい。

「生活の中の仏教思想」は一般的に作品の中に自立した言説としては現れず、登場人物たちがその中で生きているところの社会制度や情念等をいわば「依代」として現われると発表者は

考える。説経節の場合、恩という仏教思想が家制度と愛の情念に宿ることで恩愛という「生活の中の仏教思想」となっている。

説経節五作品の主人公たちは正統な家長後継者でありながら様々な理由から排除され辛苦を味わうが最後には家督を手にし栄華を極める(家督を自ら放棄する『かるかや』は例外)。つまり家督をめぐる苦闘が説経節の基本構造なのである。ところで、「家」とは擬血縁的な機能集団であり、純粹な親族集団のことではない。しかし、説経節では家督をめぐる苦闘の担い手はほとんど親子・夫婦・姉弟という親族集団に限定されている。そうさせているのは説経節の受容者たる中世民衆の生活世界の愛の情念と思われる。説経節が基本的に前提としている武家社会の家制度を民衆は自分たちのものである愛の情念を通して理解したところに恩愛という「生活の中の仏教思想」が宿ったと思われる。

登場人物たちが始終涙に暮れて生き別れたあるいは死に別れた肉親を恋い慕うという描写が説経節を特徴付けている。説経節先行研究が指摘してきたように、こうした恩愛が説経節の核心であることはまちがいない。しかし恩愛は先行研究がしばしば誤認したような近現代の家族愛とは違う。

「恩」と漢訳された原始仏教思想は、他者から受けた恵みの自覚とそれに対する感謝と返報という観念であった。それが中国において儒家思想の内に受容され報恩としての親への孝にほとんど収斂されることになった。だが、その「恩」には四恩説に見られるように、如来や三宝という普遍的・超越的な価値への志向と、父母ないしは国王という個別的・現世的な価値への